

令和4年3月1日発行 春燈/第77巻第3号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2022 March

3  
月号



## 安住敦の句

子が頼り漬菜の石を運ぶにも

『午前午後』昭和四十七年

我が家の日常を見る様なこの句にとても共感を覚える。この時期、白菜を漬けたくても重石を持ち上げる事もままならない。側に居る夫に頼むのも心もとない。それならばと、ついつい息子に頼ってしまう。帰宅の遅い自分の為に毎夜食事を作る母の頼みとあれば、手伝わぬ訳にはいかない。そんな親子のやりとりを煙草を吹かしながら眺めている先生のお姿が目には浮かぶ。

豊谷ゆき江

## 安住敦の句

約せしが如し初蝶と駅に会ふ

『柿の木坂合唱以後』平成二年

教師はきつと蝶がお好きだったのでしょうか。蝶の句が他にも十句以上あり、どの句にもときめきと喜びが感じられます。

ことに初蝶への思いは強く、「初蝶と会うほかは世事情事」と言い切るほどです。掲句、思わぬ場所で垣間見た初蝶に、教師の笑顔が目には浮かび、心が温かくなってくるようです。

小林紫乃

安立公彦

仰ぎ見る数多の星座初明り

渡りゆく鳥の静けさ初御空

襖絵の目出たき紅や三ヶ日

現し世を華と見入るや松の内

ごろ寝とは豊けきものや年の酒



燈下集

○ 西川保子

法灯をふところに山眠りけり  
悠々と風去なしけり枯木立  
うつすらと土の匂ひや落葉搔  
雲に雲重ねて十二月八日  
数へ日を刻んでゐたり古時計

○ 佐藤信子

果たせざる約束ひとつ年暮るる  
数へ日や片付けてまた散らかして  
凭りなれし机に年を惜しみけり  
雪降り来飛天の笛の音を待てば  
堂深く在す仏や雪明り

○ 園部落郷

うぶすなは出羽も奥出羽まくら酒  
紅葉もゆ鬼女を伝奇の鬼首  
罨に熊這入らんとしてやめにけり  
熊撃の老いの誰もが酒皴鼻かほ  
雪夜姉天寿にて逝くさり乍ら(実姉・岩川愛子)

○ 片桐てい女

桜島恋唄は老父初湯舟  
我待ちて朝から立つる干菜風呂  
無理すなと言ふ母待てる負真綿  
空風の泣きつ面田圃と呼ぶ学区  
隠岐の冬新島守の後鳥羽帝



○ 松橋利雄

断捨離は承知の賀状書きにけり  
折鶴の金の翼や雪催  
引く波の夕日あまねき寅彦息  
熱盛の年越蕎麦を囲みけり  
はればれと元日の雲とどまりぬ

○ 橘正義

短日やまたも忘れし用一つ  
落葉踏んでその音聞こえぬも  
見とれぬ冬満月の大きさに  
年詰る痒くなりたる耳の奥  
心身の老いを諾ひ年惜しむ

○ 三上程子

冬の蠅となりの部屋が気になりて  
鮎鱈鍋傍目八目そろひけり  
ふたごころなしとは言へず日向ぼこ  
冬眠の蛙にメール打つてみむ  
靴音や将棋倒しに年暮るる

○ 鷹崎由未子

墓を守る椽の冬芽のはがね色  
仏多き国東の里山眠る  
せせらぎを母の声とも霜の夜  
ブランドーにおとす淋しさ年つまる  
亡き人の好みにつくる雑煮かな

○ 松本峰春

掘炬燵ぬくうてまるいまるい背中  
菰を巻かれ急に老いたる庭の木々  
年の瀬の朝刊にあるこの重さ  
寒餅焼く老眼鏡をくもらせて  
三寒四温すでに梅花にその兆し

○ 木村傘休

十二月八日東京の灯の明々と  
綿虫や日に六便のバスを待ち  
妻待てば身ほとりに増ゆ雪蛭  
金黒羽白池の黄昏席卷す  
夜話や京の土産の金平糖

○ 加藤良子

初富士を見るペランダや二羽の鳩  
一点の雲なき御空今日の初富士  
けふの春折鶴に幸祈りけり  
初日の出シャッターチャンスは決めてあり  
歌留多取り見てゐるつもり腕が伸び

○ 卜部黎子

元旦の肅々と明け誕生日  
初鏡磨きて明日を見通さむ  
ひと匙にいのち味はふ齋粥  
人日の「正常です」と検温器  
松過の水音軽くひと日終ふ

○ 鈴木直充

食卓の真中に冬至南瓜かな  
考ふる裸木は地を驚つかみ  
藪柑子林間を日の退りゆく  
虎落笛山に入る日の焦げくさき  
先客の尻尾出てゐる炬燵かな

○ 深川敏子

雪ばんば摺み損ねて躓きぬ  
一日に為すこと少し冬に入る  
鈍色の雲の大群寒波急  
尺八のアベ・マリア聞くクリスマス  
去年今年一日とても無駄にせぬ

○ 近藤牧男

声かけてみても留守らし干蒲団  
床暖房表紙の固き絵本かな  
橋ひとつ渡れば他郷冬すみれ  
忘年やひとりになればひとりの歩  
二本線引く歳晩の住所録

○ 尾野奈津子

小春日や兄の筆なる蘆花の墓  
木々わたる鳥のかしまし冬日和  
枯銀杏樹上の鴉身じろがず  
耳だけは眠らぬままや炬燵猫  
鍋焼うどん言葉少なき二人かな

○ 小嶋 恵美

冬の雲重くたゆたふ運河かな (みなをみらい吟行)  
住み古りし貌なる浜の冬かもめ  
ハンブルグよりの錨に枯葉舞ふ  
へミングウェイてふ癖の風や十二月  
声かくる人もぬなくて冬の虹

○ 三宅 文子

隣家より男の声や十二月  
年の瀬や両国橋の源吾の碑 (大富源吾)  
吉良邸の残る一角実千両 (吉良十野介)  
錠固き御堂の月日寒波来る  
葱下げて雀色時別れけり

○ 太田 庄子

豊頼の薬師如来や冬つばき  
群れ咲いて閑かさつのる水仙花  
悴かむや承知してゐる事なれど  
珠算塾の墨字看板夕しぐれ  
春の雪ゆつくり息を吐きにけり

○ 青柳 雅子

天金の聖書繕く聖誕祭  
寒灯の一つ一つにあるたつき  
返り花女の道は説かざりき  
蕎麦好きで蕎麦アレルギー大晦日  
女正月山の神々集ひけり

○ 木多 芙美子

雪吊の老松威儀を正しけり  
鱸酒やうれしき時に男泣く  
ほめられもせず荻の枯れゆく風の中  
海鼠腸の話に尾鰭つきてをり  
去年今年遺影の夫の若きまま

○ 小張 志げ

たくましき冬芽のありて天を指す  
雪起し魚板の眼瞬かず  
寒灯の死角の隅に何か居る  
綿雪に睫毛も濡れて人を待つ  
女正月の風呂敷包みロゼワイン

○ 江草 礼

大聖樹灯る瞬時の静寂かな  
聖夜劇誰がマリアかキリストか  
水仙の束解く海の香をこぼし  
干大根たわみ確かむ深庇  
年果つる厚みの減らぬ名刺入

栗原 完爾

恙なや冬至南瓜の煮くづれて  
けん玉の球の外れたる寒さかな  
氏子らの踏みつけてゆく公孫樹の実  
冬の灯や梁になが置く舟の櫂  
虎落笛読みつぐ『青べか物語』

○ 岩永 はるみ

窯跡は猫の溜り場冬紅葉  
トンネルを一つ許して山眠る  
帰国子の伸びたる背丈冬木の芽  
数へ日のねんごろに拭く厨窓  
手袋の狐なかせて子をあやす

本多 遊方

一茶忌や暮れて布川の徳満寺  
ヘッドライト、テールライトや年の暮  
除夜の鐘コロナウイルス消え去れと  
ふるさとはここ茨城や初御空  
或る朝の池の水をつつきけり

林 紀夫

山門へ続く坂道枯尾花  
柿葺の狭き寺門や石路の花  
コロナ禍の終息祈願去年今年  
初日の出昭和平成令和かな  
大服や令和の御代の弥栄を



# 余言 安立公彦

引く波の夕日あまねき寅彦忌

松橋 利雄

寺田寅彦忌は十二月三十一日。東京生まれ。昭和十年没。科学者であり、漱石門の随筆家としても名声が高い。享年五十七。この行年に、「夕日あまねき」は善く合う。それは上五の「引く波の」という景の細密な描写とともに、寺田寅彦の随筆の細密さにも及ぶと言えよう。

寅彦忌の出ている歳時記の頁を見渡すと、漱石四十九歳、横光利一四十九歳、一碧楼五十九歳と、現在の作家俳人に比べ早世で、しかも後世に遺すものを持っている。

十二月八日東京の灯の明々と

木村 傘休

この十二月八日は、昭和十六年十二月八日、日本の真珠湾攻撃により太平洋戦争の勃発した日。この太平洋戦争はやがて第二次世界大戦となり、二十年八月十五日、日本の降伏により終戦となる。私は小学校六年生だった。

十二月八日が来て、日本が開戦に突入しかことを知る人も年ごとに減っていよう。この「東京の灯の明々と」は、

周五郎は山梨県生れ。とり残された人間の哀歎を汲む技法と辞書は記す。本名、清水三十六。『縦の木は残った』、『青べか物語』他の著書がある。昭和四十二年没。六四歳。

とつとつと語る自分史暖炉の火

沼田 桂子

背景、内容ともに善く揃っている。この「とつとつ」は、「訥々」か。「口ごもりながら」の意。「暖炉の火」明かりが善い。語りいるのは女性だろう。「自分史」というものは、取分け親しい人でないと話せない。時代を区分しながらの来し方を語る相手。その一つ一つに若い頃の「相手」が浮かんで来るのだ。話に聴き入り、消えそうになった暖炉の薪を継ぐ作者。冬の夜の一時の景が浮かぶ。一枚の絵だ。その絵の中で、暖炉の火のみ赤々と点る。

数へ日のひと日大事に使ひけり

大文字孝一

「数え日」とは善く出来た言葉だ。今年も残り六日だ、と指を折る作者の姿が浮かぶ。正に一日一日が大事な日である。数え日の用途はあり過ぎる。その中から何を優先するかは自分次第だ。作者はそれを、「使ひけり」と整然と記している。何をどうするかは検討済みなのだ。

こういう肯定的な句は、読んでいる方も気分がすつきりとする。数え日は年に一回しか来ない。一句の背景に、用

時代に対する一つの警鐘と言えよう。又、「東京」の文字も、今では世界中に認められていよう。

寒灯の一つ一つにあるたつき

青柳 雅子

まさにその通り。この景は、都心を離れた地域の町での景だろう。「寒灯」という言葉が、善くその様子を写している。「たつき」は辞書を見ると、「方便」の字が出て来るが、同時に示されている「生計」を示す。

夜半、民家に沿う道を歩いていると、一つ一つの家の灯りが、無性に懐かしく親しく思われる時がある。通り過ぎる家の灯明りは、生活を表し、平和を顕している。帰りの足の自ずと速くなるのも、その思いからだだろう。

虎落笛読みつぐ『青べか物語』

栗原 完爾

『青べか物語』、懐かしい本だ。この本の初版は昭和三十六年一月、同年五月に五版が出る。文藝春秋新社版。著者は山本周五郎。この小説の舞台は、千葉県浦安。「べか船」は川船の一種。目次の前頁、「百万坪の二ツ■(シ+入)」と書いた広々とした荒地の口絵写真が出ている。この小説には、三十二の章題がついている。どの章も内容が善い。

この句、「読みつぐ」が書名にふさわしい。作者の山本

を終え、大きく頷く作者の姿が浮かぶ。

散らばつて野の色に入る寒雀

小山 繁子

この句、「散らばつて野の色に入る」が写生を善く活かしている。上五は正に雀の実景。「野の色」も相応しい。最近、こういう対象の一つ一つに作者の対象を見る目が活きている傾向の句が、少なくなつた。「思い」が先行しては、実景は就いて来ない。

先般行われた「春燈九〇〇号記念全国大会」の、作者の作、〈林檎むく朝の光をまはしつゝ〉は、互選の最高点を得た。この句も対象を見る目が善く活かされている。

冬眠は深山のいのち月煌々

上野 進

動物に冬眠があるように、深山にも冬眠はある。冬枯れの日々、深雪の日々、奥山は深々と眠るように、その姿を外気から守るように座す。「冬眠は深山のいのち」、この句の上五、中七が善い。只、何となく見入っていた冬山の姿が、活性化する思いが湧く。更に座五の「月煌々」により、冬眠するそれらの山々の姿が浮かび上つて来る。

何よりも「冬眠」という言葉が善い。山脈をも抱え込む雄大さと安けさを併せ持つ言葉であり、季語である。

# 当月集

安立公彦選



○ 坂本依詠子

干し物の蒸気の揺らぐ冬日燦  
目を病める友と着く席冬日向  
お歳暮の新種の果実剥き兼ねる  
明星に抱負を語る淑気かな  
壁床の「天地」の軸や福寿草

○ 佐藤まさ子

虎落笛谷にたたずむ五輪塔  
寅年の幸多かれと日記買ふ  
フレームの草花愛でつ昼休み  
冬夕焼櫂の下の畑仕舞

○ 山口地翠

閉店の馴染みのスーパー冬ざるる  
堀越しの山茶花赤く溢れけり  
古里の家の裏山虎落笛  
冬三日月ひつそり光る帰り道  
読み書きの抄らぬ日々冬ざるる

○ 種田利子

忘恩の身と知らしめよ報恩講  
軒下にどさり白根の根深葱  
捨てがたく今年また着るちやんちやんこ  
種袋の絵のごと育つ紅大根  
年賀状句友に切に励まされ

○ 秋山 葛

手のとどく距離に孫の手掘炬燵  
雪霏々と鶏の声地底より  
調法に食器散らかし年の暮  
冬の泉小鳥の命やすからず  
真つ青な菜を洗ひをり淑気満つ

# 春燈の句

安立 公彦選



栃木 佐藤 忠

十二月八日の軍国少年九十歳  
懐手老いの一徹通しけり  
置炬燵猫の牙城となりにけり  
寅年の初日ほつこり昇りけり  
ゆり籠の様に身を置く袖湯かな

群馬 小菅 澄重

寒菊の身を細めぬる日暮とき  
佗助や静けき寺の日暮とき  
冬日向笑顔泣き顔羅漢さま  
人忙し水はしづかに十二月  
泰然と爪切る妻や漱石忌

東京 小林 文良

地下鉄を出で短日の日本橋  
歳晩やなほ片付かぬ卓の上  
突然の雪に戸惑ふ烏骨鶏  
大雪やなぐさめらるる郵便夫

兵庫 尾崎 貞

葉牡丹の渦に声して使ひの子  
庭柚子を湯船せましと浮かべをり

岐阜 高井 修一

新ばしり米寿の兄を祝ひけり  
コロナ禍の収束未だ年暮るる  
黙深き山湖に映ゆる冬の月  
鉄塔の赤きシグナル山眠る

滋賀 馬場 節子

命綱つけて天守の煤払  
鳴き交はし城へ向かふや冬鴉  
心にも凧吹くや暮れ残る  
苦も楽も思ひ出となり年果つる  
寒くとも犬と子ども散歩道

宮城 澤田 明子

芹の香に故郷を遠く偲びをり  
来てみればきのふ終へたる野焼かな  
春の草やさしくゆるる川辺かな